（研究指導科目）

| 科 目 名 | 博士研究指導Ⅰ<br>英語名： Directed Study Ⅰ | 必修/選択 | 必修 |
|---|---|---|---|
| | | 単位数 | 2 単位 |
| | | 担当教員 | 専任教員 |

【授業概要】

博士研究指導Ⅰでは、学生が、教員とともに実践上の経験や知見の集積の中にある現場の課題を検討しつつ、学術的な理論・概念についての理解を深化させる。その中で、特定現場における課題設定の力を持った学生が、より広い範囲で適用可能な課題を設定し直せる力をつけることを目指す。そのために、学生は教員から個別指導を受け、①入学当初の研究計画書を基に、自身の実践での課題意識の中から今後の自身や他者の実践に資するよう、一般化・汎用化したテーマ設定を実施し、②自身の実践を土台にしたリサーチクエスチョンを設定し、③研究実施に必要な研究倫理について学んだうえで、④博士論文の序論の一部となりうるような研究の背景・先行研究について検討し、それらを具体的にまとめた研究計画を作成する。

計画の検討経過については、研究発表会において報告する。

（1　平岡　麻里）

「教育」を社会の中で人が教え学ぶ活動と広くとらえ、①学生自身の経験（見聞きしたことも含む）をもとに設定した仮の研究テーマに関連する先行研究を幅広く収集する。その検討を通じて、仮の研究テーマが個人の経験を越えて広く社会や人類の教育のなかでどのように位置づけられるのかを考える。②仮の研究テーマを新しい知見（教育の過去や現在についての独自解釈や未来への指針）を示すことができる研究課題として絞り込み、仮のリサーチクエスチョンを設定する。③一次史料、二次史料の性質や扱い方の違いを理解し、自身の研究で主たる史料として使用する予定の文献について、史料としての有効性や限界を批判的に検討する。④ある程度の方向性が定まったら一次史料の所在を確認し、研究計画を作成する。

一次史料は種類により入手の確実性が大きく異なるため、リサーチクエスチョンや研究計画の変更を念頭に置きつつ調査を進めるよう指導する。

（2　細田　満和子）

学習者が個人と社会との関係性を理解し、それぞれの現場で抽出される課題について、社会学という道具を使用することで明確化するスキルを身に付けてもらう。前半では、学習者が現場の課題をもとにして、教育・医療・福祉の連携論や病に関する社会学（医療社会学）的考察などの点で問題関心を整理し、テーマ設定を行う事を促し、後半では基盤科目や専門科目での成果も生かして、テーマにふさわしい調査法を選び、深めていく。同時並行で、実践に関連付けられた理論書やテーマに関する重要文献の精読、知識・情報の収集を促す。問題に対する仮設構築、研究計画を作成し、実践する。

（3　松浦　均）

博士学位論文の執筆作成を進めていく上での基本的事項の確認を行う。教育心理学分野での研究（理論研究および実践研究）を概観しながら、各自の教育現場での経験や実践と照らし合わせながら、研究テーマを探索する。そのステップとして①関心のある問題や課題をリストアップする。②先行研究や文献をあたり、自身の研究テーマがどういう研究分野領域に該当するのか確認の作業を行う。③自身の研究テーマと先行研究との関連や関係性から、リサーチクエスチョンを明確にしていく。④自身の研究の方法論を選択する。すなわち質問紙調査・文献調査・観察・面接・事例研究等の方法論のなかから適宜選択する。⑤博士研究のイメージやストーリー性を考えて，研究計画を作成する。⑥研究倫理に関する事項を確認し、研究倫理申請を行う。

（4　芳川　玲子）

論文の第一歩はテーマ設定だが、最も難しいのもテーマ設定だと言えよう。執筆者は自分の今までの

経験を大切にしながら、一般的な事象からリサーチクエスチョンを見つけ、それを研究テーマに読み直す。特に実証型の研究は論文構成や研究手法が異なるため、マナーを踏まえて取りかかることが大切である。テーマが決まり、手法を特定し、コツコツと思考と実践を練り上げ、そして最終ゴールに辿り着くのである。テーマ探索のためには自分自身と対話しながら、自身の思考を広げ、興味関心のある海内外の論文をいろいろ読みあさり、研究の最初のデザインを構築する。

（5　土岐　玲奈　副指導のみ）
　学校及び子供の支援機関における支援の実践は、教育、心理、福祉の専門性が重なり合う領域において取り組まれている。教育及び支援の実践を臨床的な視点から探究するため、これらの領域における諸問題を振り返って研究テーマを探索する。
探索のステップは以下の通り。
①教員や支援者としての経験の個人史（ライフヒストリー・ライフストーリー）をたどりながら、関心の強い問題や課題を絞り込む。②自身の関心に沿う諸文献にあたって、自分の問題関心と対話しながら研究テーマに練り上げる。③研究テーマに関する先行研究を検討して、検討すべき諸項目を列挙する。④文献調査・インタビュー・参与観察・アクションリサーチ・質問紙調査・統計資料分析などの実証方法のなかから、自分の研究方法を適宜選択する。⑤諸項目と研究方法を立体的に構成し、現場に則した研究倫理を踏まえつつ、研究計画案を作成する。

（6　古壕　典洋　副指導のみ）
　教育実践の省察を踏まえたテーマを中心に、省察の方法に基づいた研究テーマの絞り込みを行う。具体的には、①はじめに、学生との対話を通じて、入学動機や進学動機を入学当初の研究計画書をもとに確認し、②次に、自身の経験や暗黙知・経験知の省察を促し、フレーム（枠組み）分析を行い、実践上や職場上の諸課題を研究テーマへと絞り込む作業を進める。③さらに、絞り込んだ研究テーマを明確化し、また自身や他者の実践にも有用な汎用性のあるものにするために、精選された先行研究やグッド・プラクティスの共同探究を進める。

（7　原田　公人　副指導のみ）
文献レビューを重視する。文献レビューでは、教科書、学術論文、専門雑誌、新聞、研究トピックなど、あらゆるタイプの文献に目を通すことを推奨する。特に、審査付き学術雑誌に掲載されている論文を中心に議論する。文献レビューを通して、①当該研究分野の基本的な文献を理解する。②当該研究分野における最先端の研究動向の水準と問題点を理解する。③当該研究分野の中で学生の研究テーマを的確に位置づける。④当該研究分野に対して独自の視点を確立し、研究の発展方向を認識することを目指す。また、学生との議論を通して、研究領域を明確にし、研究テーマを選択し、仮タイトルの決定及びリサーチクエスチョンを設定する。並行して、研究遂行に当たっての研究計画を設定する。

【キーワード】
　現場の課題の明確化，テーマ設定，リサーチクエスチョンの策定，現場に則した研究倫理，
　研究の背景・先行研究の検討，研究計画の完成

【授業の到達目標】
学年を通じて以下の点を求める。
　1．現場の課題を実践の経験や知見の文脈の中で考える。
　2．学術的な理論・概念を学び、そこから研究としての記述の仕方を学ぶ。
学年の各段階において、以下の点を求める。
　3．今後の自身や他者の実践に資するようなテーマを設定できる。
　4．自身の実践を踏まえたリサーチクエスチョンを設定できる。
　5．各現場の状況に則した研究倫理の在り方を理解している。
学年末の時点で以下の点を求める。
6．博士論文の序論の一部となりうるような研究の背景・先行研究について検討し、研究方法についても精査したうえで、専門科目や基盤科目の学修成果も踏まえた研究計画を作成する。

【授業の方法】
スクーリングの実施【あり】　スクーリングのメディア受講【可】

【授業計画】
本科目は、教員の個別指導と学生の成果発表、それに合わせた事前・事後の学修からなる。

1）第一段階
学生は、教員の指導の下、出願時に提示した研究テーマに基づいて、単なる問題事象の解決に留まらない、一般化可能なテーマとなるように、再検討していく。その過程では、スクーリング（個別指導）での教員との対話を重視していく。

2）第二段階
テーマが決まった段階では、リサーチクエスチョンを設定していくが、これらを決めて、深める段階では、先行研究やグッドプラクティスの検討も併せ行っていく。

3）第三段階
学修の過程では、専門科目を通じて、実践を省察する視点や、実践を深める観点を学んでいることが想定されており、それを踏まえて自身の現場をめぐる背景状況を考えていく。また、基盤科目では自身の領域に活かせる研究方法を学んでいることが想定されており、それを踏まえて、自身の現場の状況や実践上の特性に合った研究方法を選び取っていく。この過程では、併せて現場に則した研究倫理の在り方を学ぶ。

4）第四段階
年間の最終段階では、これらをまとめた研究計画を策定する。

上記に合わせて、学生は、年度で 2 回行われる研究発表会のうち、年度の中間地点となる後期の初めの研究発表会で成果発表を行う。

【履修にあたっての準備・履修上の注意点】
本科目の履修にあたっては、入学時に簡易的であっても研究計画が整備されていることが条件となる。
さらに、学修の過程の中では、他領域との比較も試みながら実践の特性を理解し、必要な焦点化や省察を行い、計画をさらに深めていくことが求められる。

【スクーリングでの学修内容】
研究指導教員と学生の合意形成のもと日時を設定し、定期的に研究指導を行う。個別指導にあたっては、学生は実践上の課題、前回の指導内容をもとに整理したテーマを持ちこみ、指導を受け、指導後は、指導の中で学んだことの報告を行うこととする。
また、年度で 2 回、研究発表会を実施する。1 回目は他者の実践を踏まえた発表やガイダンスの内容から学び、2 回目は発表を行う。いずれの回も他者の発表から学んだ内容についての振り返りを行い、それを通して自身の実践や研究にどう生かせるか、自身の実践をどう客観化、相対化できたかについて報告する。あわせて、自身の発表の際には、事前学修としてプレゼンテーションや予稿の準備を行い、事後には自身の発表に関して指摘された点のまとめと振り返りを行うものとする。

【評価方法】
研究発表会での発表とその事前学修・事後学修（50%）、年度末の「研究計画書」（50%）

【テキスト】
授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する

【参考図書】
授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する